

## お茶の水女子大学の行方 伝統とブランド



本田 和子 学長

法人化を目前に、いま、中小規模の国立大学関係者の集まりで、必ずといってよいくらい口にされる話題がある。すなわち、法人化されたそれぞれの大学は、今後、どのようなレゾナントルを掲げて生き延びていくかという話題である。歴史と伝統、そして、現在の規模・設備・人員の全てに渡って恵まれた旧帝大系は別として、一九四九年の学制改革で一斉に大学となったいわゆる新制大学は、いま、改めてその存在意義を問い直されているのである。

そんなとき、私どもの耳に囁かれるのが、「お茶大はいいですね、とにかくブランドだから」という言葉である。その囁きは、規模の小ささのゆえに、将来の存続を危惧している私ども本学関係者たちへの慰めなのだろうか。それとも、本当に、お茶大のブランド力にながしかの価値を見いだしている人たちの羨望の表現なのだろうか。

ある大手予備校の関係者が、女子大の存続に関して、アメリカの例を引きながら、次のような意見を述べたことがある。

すなわち、アメリカ合衆国では、一九六〇年前後の公民権運動の影響もあって、女子大は男性を排除するから教育上の差別であると指摘され、共学への転換要請がしきりであった時期があった。建国の初期に東部に誕生して一世に余の伝統を持つ女子大の幾つかが、

共学へと改組転換を余儀なくされたのもその一連の動きであろう。しかし、その波を何とか凌いで、女子教育の伝統を守ろうと試みた女子大も少なくなかった。にもかかわらず、それらの女子大もその後の少子化の波に抗し難く、受験人口の倍増を狙って共学へと転換する例が増えつつあるのが現状である。こうした状況を見ると、今後アメリカの女子大は以下のような二極化を遂げるであろうと推測される。すなわち、共学化して特色の無い小規模カレッジへと転換するものと、「伝統を守って存続し続ける名門女子大との二極」に。そして、この傾向は、日本の場合も同様と考えてよいのではないだろうか。

確かに、日本の場合も、最近の私立女子大学の共学転換への動きは、この見解を裏付けて余りあると言えそうである。そんななかでいわゆる名門私立女子大が、その特色を鮮明にし、広報活動を活発化するなどして受験生を増やしつつある現状は、「共学化と女子大特色鮮明化」という女子大の二極化を物語っているように。女性指導者の育成という建学の精神を守って、女子大であることにためらいもなく、微動だにしないこれら私立女子大学の健闘ぶり。それは、私たちにとって、十分に範とするに値する頼もしさなのだから。

長い時間の中で育まれた伝統は、仮にその制度や外形が変わったとしても神髄は廃絶され得べくもなく、密やかな水脈として流れ続けるという見方もある。しかし、一度壊滅に瀕するならば、その復元が困難であるものも少なくない。いま、私たちに求められているのは、「変えてはならないもの」が何であり、「変えることの出来るもの」が何であるかを、賢く見定め分別する視力ではないだろうか。仮に本学が女子教育の名門に数えられ、そ

の伝統に関しては人後に落ちないと誇ることが出来るかすれば、いま、それを、格別の公算も無しに手放すの愚は避けねばならない。「優れた女性を育ててきた」という伝統、それは、知的・教育的資源として、十分に活用可能なものである。伝統校がしばしば優位に立つのは、そうした掛け替えの無い貴重な資源を有しているからであり、その資源は、時間の堆積に裏付けられているがゆえに容易に他の追随を許さぬものである。「お茶大はブランドだから」と耳に囁かれる言葉は、「ブランド」という比喩に託して、こうした伝統の価値を指し示していると言つことが出来るであろう。

ところで、資源は活用されなければ資源としての価値を発現することはない。「女子を育てる」という歴史的営みが、手放し難い伝統であり、活用すべき「資源」であるならば、私どもの努力は、従来に増してその資源の活用のために注がねばならない。女性は「どのような条件」が用意されたとき、「どのような営み」をよりよく遂行し得るのだろうか。少子化の進む将来の人口状況を考えるとき、女性の各種社会活動への参加は、従来に増して要請され、その条件の整備は、従来とは比較にならない重要条件とされねばならない筈である。何故なら、従来のな仕方ですれが遂行されるならば、女性の力は、従来程度にしか発現され得ず、少子化に悩む先進諸国は、将来ともに深刻な人知力の不足に悩まねばならないだろうからである。私たちが、いま、「女子教育の名門校」というブランドを与えられていて、その伝統的資源に恵まれているとしたら、その有効活用こそが、私たちが現在果たすべき責務であり、今後に委ねられた課題でもあると言い得よう。